

【2020年度 第3四半期決算説明会】 質疑応答概要

※説明会における主な質疑応答をご紹介します。

<日 時>	2021年2月9日(火) 15:00 ~ 16:00
<出席者>	明治ホールディングス(株) 取締役専務執行役員CSO 古田 純

**Q1: 第3四半期のプロバイオティクスおよび明治ブルガリアヨーグルトの減収要因は何ですか。また、今後の取り組みを教えてください。**

A1: プロバイオティクスの減収要因は、ライトユーザーとミドルユーザーの離脱によるものと捉えています。離脱の背景として3点が挙げられます。1点目として、プロバイオティクスの主力品である「R-1」の売り上げは、インフルエンザの流行と連動した動きをしてきましたが、今年度はインフルエンザが例年に比べ流行していないことが挙げられます。2点目として、コロナ禍で店頭でのマーケティング活動が制限されており、低価格帯の商品へ流出する傾向にあります。3点目として、健康を訴求している商品がヨーグルト以外にも数多くあり、他の食品や飲料に流出している可能性があります。

「明治ブルガリアヨーグルト」の減収要因は、ドリンクタイプの苦戦です。ドリンクタイプは、他の飲料カテゴリーに流出している可能性があります。一方で、主力の400gカップは巣ごもり消費により好調に推移しています。

両商品とも、今後様々なマーケティング施策を展開し、売り上げの回復を図っていきます。

**Q2: 菓子事業は、第4四半期は増収計画ですが、どのように計画を達成するのですか。**

A2: 第4四半期は、チョコレートの最需要期であるバレンタイン期間にチョコレートの拡売を目指します。さらに、チョコレート、グミともに新製品の展開を強化し計画を達成したいと考えています。

**Q3: 第3四半期累計で中国の牛乳・ヨーグルト事業が減収の背景を教えてください。また、今後の事業環境についてはどのように捉えていますか。**

A3: 新型コロナウイルスの感染拡大の影響により上期における業務用牛乳が苦戦したことが影響しました。一方で、市販用牛乳は大変好調に推移し、ヨーグルトは前年並みの販売でした。中国市場は既に正常化しつつあり、業務用牛乳が回復してきた結果、第3四半期は増収となりました。来年度以降、牛乳は市販用、業務用ともに売り上げの拡大が期待できます。

**Q4: 食品セグメントは下期減収減益の見込みの中、来年度はどのように増益を目指していくのですか。**

A4: 今年度、新型コロナウイルスの感染拡大により取り組みが難しかった新商品の展開を強化することにより、増益を目指します。但し、新商品の定着には店頭での営業活動が重要なので、発売時期は新型コロナウイルスの収束動向をみながら検討していきます。

**Q5: 第3四半期のKMバイオロジクスの増益要因を教えてください。**

A5: 主力のインフルエンザワクチンの増収に加え、同ワクチンの生産効率の向上や血漿分画製剤の棚卸評価減の減少が寄与しました。

**Q6: KMバイオロジクスの来年度の業績の考え方を教えてください。今年度以上にインフルエンザワクチンの生産性が改善できるなど、既存ビジネスの利益拡大の余地はありますか。**

A6: インフルエンザワクチンは、流行に合わせて製造用株が選定されます。今年度は増殖性の良い製造用株が選定されたことにより、生産効率が向上し出荷量が伸長しました。来年度については、どのような株が選定されるか承知していないため、現時点では、はっきりしたことは言えません。一方で、インフルエンザワクチン以外のヒト用ワクチンおよび血漿分画製剤は販売拡大の余地があると考えています。生産体制および販売体制の両面を強化し、業績の拡大を図っていきたいと考えています。

**Q7: Meiji Seika ファルマとKMバイオロジクスは、アストラゼネカ社とワクチンの国内供給に関する契約を締結しましたが、業績へのインパクトはどの程度ですか。**

A7: 経済条件等の契約内容については開示できません。

以上